

探究的な問い (Why) を組み込んだ博学連携授業モデルの開発 — 「問いの性質」と「学芸員の専門的知識」に着目して—

Development of a Collaborative Museum-School Teaching Model Incorporating
Exploratory Questions (Why):
Focusing on the "Nature of Questions" and "Curatorial Expertise

八田 友和 (クラーク記念国際高等学校)

Tomokazu HATTA

(CLARK Memorial International High School)

要 約

本研究は、横浜市歴史博物館と学校教育との連携を事例に、「問いの性質」に着目した授業分析をおこない、先行授業実践がもつ課題と特質を明らかにしたうえで、探究的な問い (Why) を組み込んだ博学連携の授業モデル開発をおこなうものである。先行授業実践の分析では、How 型の発問が多いといった課題が明らかになった。授業モデルでは、探究型の発問 (Why) を設定し、学芸員の専門的知識の活用を組み込んだ指導案を作成した。これにより、「知識の断片的な獲得」「学芸員の専門的知識の具体を明らかにする」といった課題の克服が目指せると考えている。

Keywords : 問いの性質、Why 型の発問、学芸員の専門的知識、考古学の考え方、博学連携

1. はじめに

本稿では、博物館とりわけ歴史博物館においては、「なぜ (Why)」という発問が探究的な学びをうながす有効な方法であることを提案する。『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説—社会編— (以下、『要領解説—社会—』)』の「歴史的分野の目標、内容及び内容の取扱い」の「(3) 内容の取扱い」において博物館・資料館の活用について、次のように記載されている。

ク 日本人の生活や生活に根ざした文化については、政治の動き、社会の動き、各地域の地理的条件、身近な知識の歴史とも関連付けて指導したり、民俗学や考古学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査したりするなど具体的に学ぶことを通して理解させるように工夫すること。

(出典) 『要領解説—社会編—』 p.125 (下線筆者加筆)

ここから、博物館や郷土資料館などを活用した具体的な学びが求められていることがわかる。具体的に学ぶためには、博物館が所蔵する資料や学芸員がもつ専門的知識が重要に

なることは多くの先行研究で述べられている。しかし、人的資源や物的資源を整えるだけでは不十分であり、教員ないし学芸員から発せられる「問い」が効果的なものでなければ、いくら人的資源や物的資源を整えても、子どもたちの学びには寄与しづらい。

そこで、授業内に「なぜ (Why)」という問いを組み込むことで、博物館のもつ人的資源・物的資源を活用することをうながし、先述した学習指導要領が求める具体的な学びを踏まえた博物館の強みを最大限活かした探究学習につなげることを提案する。では、なぜ「Why」と問うことが探究学習につながるのか。それは、「なぜ (Why)」が存在している社会事象に対する原因を考えることをうながすからである。

例えば、江戸時代を扱った授業において「なぜ、ペリーは日本に来航したのか」と問うことで、ペリーが日本に来航するきっかけとなった「日本の港を燃料・食料供給地として利用したい」といった原因が明らかになる。次いで、「では、なぜ朝鮮や琉球ではなく、日本なのか」と問うことで、琉球に来航し、自由貿易を求めていたことや、日本近海でアメリカの捕鯨船が活動することが多かったことをなどが明らかになる。ここから、結果として存在している社会的事象から、そ

の原因を探り、探究的できる点から「なぜ (Why)」の問いかけが有効だと考えた。このように、結果から原因を探り、その原因にさらに「なぜ」と問うことで、探究的な学びをうながすことができる。

「なぜ」という発問の他に、よく用いられる発問として「どのような」と問う How 型の発問が存在する。例えば、「織田信長はどのような政策をおこなっただろう」という発問をした場合、織田信長がおこなった政策を網羅的に学習する必要があり、一つひとつの政策やその影響を吟味することが困難ことはもちろん、表面的な学習に終わってしまうことが容易

に想像できる。

以上を受け本研究では、「問いの性質」に着目した先行授業実践の分析をおこない、先行授業実践がもつ課題や特質を明らかにしたうえで、探究的な問い (Why) を組み込んだ博学連携授業モデルの開発を目指したい。

2. 「問いの性質」と獲得される知識について

まず、社会科の授業で発せられる「問い」について、岩田一彦が示した問いの性質と習得される知識の関係をもとに整理する (表1)。

表1 問いと習得される知識の関係

問いの種類	習得される知識
① 情報を求める問い (What, When, Where, Who)	記述的知識
② 情報間の関係を求める問い (Why)	説明的知識 (概念的知識)
③ ①②の中間に位置する問い (How)	分析的知識
④ 価値判断を求める問い (Which)	規範的知識

(出典)『社会科授業研究の理論』p.128 を参考に筆者作成

表1では、社会科の授業で用いられる「問いの種類」と「習得される知識」を整理した (注1)。博物館を活用した授業をおこなう際は、「なぜ (～は起きたのか)」という Why 型の発問が大切だと考えている。「なぜ」以外の発問は、教科書や資料集などで解答を見つけることが比較的容易である。しかし、「なぜ」と問われると自然と探究的な学びをしなければならなくなる。よって、探究的な学びをおこなうにあ

って、生徒が十分に探究できるだけの資料や専門的な知識が必要となる。そのため、学芸員がもつ専門的知識や博物館が所蔵する資料を提示できるという点で、授業において博物館や学芸員を活用することが有効な方策になりうる。

なお、岩田は授業において獲得される知識について表2のように述べている。

表2 授業で習得される知識

記述・分析的知識	個別的事象・情報に関する知識 (=記述的知識), 及び目的, 手段・方法, 構造, 過程, などの相互関係を明らかにする知識 (=分析的知識), で今日の社会の変化への対応力は弱く, 転移性が低い。
説明的知識	社会事象間の関係を原因と結果の関係で示した知識。Why の問いに対応して習得される知識で, 社会事象間の関係の説明で中核をなすもの。
概念的知識	特定の事象を超えて法則性を組み込んだ知識で転移性が高い。

(出典)『小学校社会科の授業設計』を参考に筆者要約

本研究では、Why 型の発問をおこなうことで、説明的知識や概念的知識の獲得を目指す。以上の視点を踏まえ、先行授業実践の分析をおこなう。

3. 分析対象の授業実践

本研究では、横浜市歴史博物館の HP で公開されている

指導案 (17 例) を分析対象とした (注2)。横浜市歴史博物館を対象とした理由として、①博物館の HP 上で指導案が公開されているため、多くの人が気軽にアクセスできる点、②研究者ではなく、現場の実務担当者 (教員や学芸員) が執筆している指導案が多く、より博学連携の実態にそっていると考えた点、以上の2点があげられる。

なお、本実践で取り上げる授業実践は次のとおりである

(表3)。

(表3) 分析対象とした先行授業実践一覧

項目	単元名	校種	教科科目
1	昔の川和のまちにタイムスリップ	小	社会科
2	山田の昔のくらしをたずねてみよう	小	社会科
3	入り海を新田にした吉田勘兵衛	小	社会科
4	横浜のために力を尽くした人々 ～ヘボン・言葉の壁を越えて～	小	社会科
5	横浜のために力を尽くした人々 ～発展学習～	小	社会科
6	大昔の暮らしと国づくり	小	社会科
7	開国で世界とつながった日本	小	社会科
8	縄文文化と弥生文化	中	社会科
9	東アジアの中の日本～ムラからクニへ～	中	社会科
10	鎌倉への道	中	社会科
11	江戸幕府の成立	中	社会科
12	町人の生活と交通の発達	中	社会科
13	日本の開国とその影響	中	社会科
14	震災と横浜	中	社会科
15	ヨコハマもののはじめ～横浜から広まる文明開化～	中	社会科
16	空襲と横浜	中	社会科
17	横浜から学ぶ、日本の産業革命	中	社会科

(2021年4月25日、筆者作成)

表3に記載のある指導案から“問い”を抽出したものが表4である。

(表4) 単元名と授業における発問内容 (中学校歴史分野での学習を想定)

項目	単元名	発問内容
1	昔の川和のまちにタイムスリップ	昔は <u>ど</u> なくらしをしていたのか、調べてみよう。
2	山田の昔のくらしをたずねてみよう	むかしの人は <u>ど</u> なくらしをしていたのだろう。 昔の家の中では、 <u>ど</u> んな生活をしていたのだろうか。
3	入り海を新田にした吉田勘兵衛	こんな広いところを、誰が何のために埋め立てたのだろう。どうやって埋め立てたのだろう。
4	横浜のために力を尽くした人々 ～ヘボン・言葉の壁を越えて～	明治時代になり、外国からは <u>ど</u> んな文化が日本に入ってきたのかな。 当時、日本に住んでいた人たちは、外国から来た人を見て、 <u>ど</u> んなことをおもったのだろう。 ヘボンって <u>ど</u> んな人 辞書作りをするにあたって、当時、ヘボンが苦労したことは <u>ど</u> のようなことだったのだろう。 ヘボンが思い描いた世の中は <u>ど</u> のような世の中だろうか。
5	横浜のために力を尽くした人々 ～発展学習～	横浜の発展にかかわる人には <u>ど</u> んな人がいるのだろう。
6	大昔の暮らしと国づくり	縄文時代の人々は、 <u>ど</u> のような暮らしをしていたのか、詳しく調べよう。 米作りは、どうやって始まったのだろうか。 米作りによって「むら」は <u>ど</u> のように変化しただろうか。 どうして古墳が作られるようになったのかな。

		「くに」はどうなっていったのかな。 米作りによって、「むら」の人々の生活はどのように変化したのだろうか。
7	開国で世界とつながった日本	ペリーは横浜に来たのはなぜだろうか。また、江戸幕府は、どのような対応をしたのだろうか。 ペリーに開国を迫られたときに、自分だったら開国するだろうか。 幕府を倒した人々は、どのような取り組みをして、新しい国づくりをすすめたのだろうか。
8	縄文文化と弥生文化	(土器づくりをおこなった上で) どうしてここまでして土器が必要なのか。
9	東アジアの中の日本～ムラからクニへ～	鉄と前方後円墳はなぜ各地に広まったのかを考える。
10	鎌倉への道	散見されない
11	江戸幕府の成立	散見されない
12	町人の生活と交通の発達	散見されない
13	日本の開国とその影響	散見されない
14	震災と横浜	散見されない
15	ヨコハマもののはじめ～横浜から広まる文明開化～	(堤磯右衛門の肖像画を提示して) これは何でしょう。 英語が書いてあるけど、「soap」は何だろうね。 どうして石鯰を作ったのかな。
16	空襲と横浜	散見されない
17	横浜から学ぶ、日本の産業革命	(資料) に書かれている漢字を読んでみましょう。 富岡製糸場では何が作られていた工場でしょうか。 横浜線が、東神奈川から八王子間を結ぶ鉄道として開業したのはなぜでしょうか。

※ 下線は筆者が加筆している。

※ 「展示品を見て、〇〇について考える」といった表現が指導案上に散見されるが、指示なのか発問なのか明確ではないため、ここでは取り上げていない。その場合は「散見されない」と表記している。

表4では、授業の単元名と発問を整理した。下線をひいた問いに着目すると「どのように」といったHow型の発問が多いことがわかる。例えば、単元「大昔の暮らしと国づくり」の授業実践においては、「縄文時代の人々は、どのような暮らしをしていたのか、詳しく調べよう。」という発問がおこなわれている。この発問から導き出される解答として、「狩猟採集の生活・木の実をとっていた・漁労をしていた」などが想定される。ここから、How型の発問をおこなうことによって、多くの記述的知識や分析的知識の獲得を目指すことが予想される。しかし、社会事象間の関係を原因と結果の関係で示した説明的知識の獲得に至ることは難しいと考えている。

一方で、「東アジアの中の日本～ムラからクニへ～」の授業における「鉄と前方後円墳はなぜ各地に広まったのかを考える」の発問については、鉄と前方後円墳が広がったという結果に対して、「なぜ」と問うことでその原因を明らかにしようとしている。このWhy型の問いにより、ヤマト政権と鉄の関係はもちろん、「ヤマト政権の象徴的シンボルとして前方後円墳が各地に造られるようになったから」といった解答が導き出される。また、1つの結果は、1つの原因によって起因していることは少なく、複数の原因が1つの結果

を導いていることが多いため「なぜ」と問うことによって、複数の原因を明らかにすることにもつながると考えている。

以上を踏まえて、博物館の人的資源や物的資源の活用を踏まえた、「Why型」の問いを重視した博学連携授業モデルを開発したため、その概要を整理提示する。

4. 授業モデルの開発

(1) 単元名

「考古学の考え方をを使って、古代の謎を解き明かせ！」

(2) 単元の目標

① 主体的に学習に取り組む態度

原始・古代における、考古資料の分布と交易による物質資料の推移や移動について主体的に調べることができる。

② 思考・判断・表現

権威を象徴する装身具が、時代とともに移り変わっていくことを考えることを通して、原始・古代史における政治構造の在り方を考察することができる。

③ 知識・技能

全国各地で青銅器祭祀から前方後円墳祭祀に移り変わることを通して、前方後円墳の築造および、前方後円墳祭祀が、政治を進めていくうえで重要であったことや、それら

が社会に与えた影響を理解できる。

(3) 教材観

考古学の考え方（本稿では特に、分布論・編年論・機能論・用途論を活用する）を活用した授業モデルの開発をおこな

う。考古学は、物質資料を対象とした学問であるため、文献史学とは異なる「考え方（研究手法）」を採用している。考古学研究特有の考え方は、次の表5の通りであると筆者は考える。

表5 考古学研究の「考え方」

考え方	方法
編年論	時系列。時間軸。モノの形の変遷観。
分布論	分布。空間軸。モノの空間的な広がり。
型式論・様式論	形。モノの形・特徴から共通点・相違点を導き出す。
機能論	機能。モノがもつ「使える」属性。
技術論	技術。モノの作り方。
用途論	用途。実際にモノをどう使ったか。
層位論	時間・順番。時間・空間での「モノ」の変遷観を考えるヒント

(2021年5月3日、筆者作成)

表5のような考古学研究で用いられる「考え方」を活用することで、社会的事象への理解が深まる。例えば、前方後円墳を授業で取り上げようとする、「お墓として使用された」という「用途論」を理解したうえで、「ヤマト政権の象徴的シンボルとして機能した」という「機能論」を踏まえて考えなければ、「前方後円墳の広がり＝ヤマト政権の広がり」と理解することは困難である。このように、考古学研究特有の手法である、「分布」「編年」といった考え方を踏まえた、教材研究や授業開発が求められる。その際、日常業務でその考え方を活用している学芸員の協力を仰ぎ、教材研究や開発、指導案の作成などをおこなうことで、子どもたちが考古学者のように考え、社会的事象を理解することが目指される。

以上を踏まえ、本稿における「考古学者の専門的知識」として「最新知識、豊富な情報や資料、考古学の考え方」の三つを想定している。まず、最新知識に関しては、教科書や考古学の本に反映されることが少なく（反映までに時間がかかるため）、学芸員に頼る必要がある。「豊富な情報や資料」

については、博物館が所蔵している情報や資料を指している。一方で、「考古学の考え方」については、例えば、古墳の分布図のように教科書に掲載されているケースも散見される。しかし、古墳の分布図は1枚のみ掲載されているケースが多く、どこからどのように広がったのかを理解することが難しい。どこから広がったのかを生徒自身が理解するためには、時系列に並び替えた分布図を提示して考えさせるなど、教科書の域を超えた資料や情報が必要になるため、ここに学芸員の専門的知識が活用される。

なお、本授業モデルは、以下の授業モデルの②を想定している。

- ① 学芸員と教員による教材研究の際に学芸員の専門的知識（最新知識・豊富な資料や情報、考古学の考え方）を活用する、
 - ② 学芸員の専門的知識の教示と資料提供を受ける、
 - ③ 学芸員が来校して、専門的知識を活用しながら教員と一緒に出張授業をおこなう、
- といった連携のかたちが想定される。

(4) 本時の流れ

段階	学習活動	○発問、指示（説明）・予想される反応	◇手だて ◎支援【資料】
導入	1. 既存知識の確認	○古墳にはどんな種類があっただろう ・円墳、方墳、前方後円墳、前方後方墳	◎既存知識を共有し、前時の復習をおこなう。
	2. 物質資料の確認	○その中でも、大和政権の大王や有力者が埋葬されている墳形はなんだろう。	

<p>展開</p>	<p>3.用途論と機能論の把握</p> <p>4.物質資料の時間的・空間的把握</p> <p>5.分布論の応用</p>	<p>・前方後円墳</p> <p>○前方後円墳のジオラマ模型を事例に、前方後円墳の構造や分布について説明を受ける。</p> <p>○では、前方後円墳はどのように全国に広がっていったのだろう。分布図を並び替えてみよう。</p> <p>○前方後円墳はどこを中心に全国に拡大していますか。</p> <p>・近畿地方、関西</p> <p>○どこまで広がっていますか？</p> <p>・東は宮城県や岩手県あたりまで。</p> <p>・西は鹿児島県まで</p>	<p>◇学芸員による説明をおこなう。</p> <p>【資料1】 【資料2】 【資料3】 【資料4】</p> <p>○前方後円墳が大和地方から全国に広がっていくことを確認させる。</p> <p>◇前方後円墳の最大域を確認させる。</p>
	<p>6.編年論の応用</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">MQ、なぜ、前方後円墳が全国に造られるんだろう（分布論の応用）</p> <p>○前方後円墳を造ることで、どのようなメリットがあったのか、想像してみよう。</p> <p>・公共事業ができる。仕事ができる。</p> <p>・亡くなった人の権力を見せつける。</p> <p>・大和政権のシンボルとして機能した。</p> <p>・祭祀の場として使用された。</p> <p>○なぜ、そのように考えましたか。</p> <p>・公共事業ができる。仕事ができる。 → <u>大きな古墳を造るために仕事ができるから。</u></p> <p>・亡くなった人の権力を見せつける。 → <u>他の地域の人にアピールするため。</u></p> <p>・大和政権のシンボルとして機能した。 → <u>仲間意識をもつため</u></p> <p>・祭祀の場として使用された。 → <u>全員が集まるところで政治をおこなえるから</u></p> <p>○（古墳のジオラマや古墳祭祀の復元図を提示し）前方後円墳を全国に築造した理由を、生徒が考えた前方後円墳を造るメリットを踏まえ、学芸員が解説をおこなう。</p>	<p>◇答えに代えて、前方後円墳を築造することのメリットを考えさせる。</p> <p>○メリットが出てこない場合は、学芸員から複数のメリットの提示をおこなう。</p> <p>◇考古学の考え方である用途論と機能論を用いる。 【資料5】</p> <p>◇前方後円墳を築造することのメリットとその理由を生徒自身に考えさせ、学芸員の説明を聞く流れとする。</p> <p>◇古墳儀礼の特徴が、南は鹿児島から北は岩手県に至る広い範囲で共有され、儀礼が共通化したことで、その内容に格差をつけることが可能になった。古墳の形と規模には顕著な階層的で序列的な秩序があり、ヤマト政権内の政治的身分が反映されていることを理解する。</p>
<p>7.古墳と寺院の比較・検討</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">MQ、なぜ、前方後円墳が作られなくなっていくのだろう（編年論の応用）</p> <p>○寺院を建立することにどんなメリットがあるだろう。</p> <p>・目新しさがある。</p> <p>○目新しさがあることだけかな。今まで寺院を見たことがない人が見たらどう思うだろう。</p> <p>・すごいと思う。</p> <p>・立派な建物だと思う。</p> <p>○寺院にはどんな建物や資料があるだろう。</p> <p>・金堂、五重塔、中門、仏像、仏具</p> <p>○それらの建物を作る技術はどこから来たんだろう。</p> <p>・中国、朝鮮半島</p>	<p>◇予想にかえて、寺院に込められた知識と技術を読み解くことによって、変化した理由を考えさせたい。</p> <p>○寺院建立には、測量・建築など、広範囲の知識が必要であることを説明することで、寺院を建立する過程で大陸の高度な知識や技術が手に入ることを理解させる 【資料7】</p> <p>◇書紀にある出来事を提示して寺院建立が王権への忠誠を示す</p>	

		○そのほかに寺院を建立することにどのようなメリットがあったらう。資料7から考えてみよう。	誓約になったことを説明する。 【資料8】
まとめ	8、まとめ	○お寺を建立することにどのようなメリットがあったのか整理しよう。 ①シンボルとしての位置づけ ②大陸の高度な知識や技術が手に入る ③王権への忠誠を示す役割を果たした。	◎ノートにまとめさせる。

【資料1】3世紀の前方後円墳分布図（石野博信(編)『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地理院地図を用いて筆者作成）、【資料2】4世紀の前方後円墳分布図（石野博信(編)『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地理院地図を用いて筆者作成）、【資料3】5世紀の前方後円墳分布図（石野博信(編)『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地理院地図を用いて筆者作成）、【資料4】6世紀の前方後円墳分布図（石野博信(編)『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地理院地図を用いて筆者作成）、【資料5】前方後円墳で祭祀がおこなわれている様子、【資料6】大和の古墳の編年（『大和の古墳の編年』より筆者作成）、【資料7】寺院の復元画「飛鳥寺 地図」をもとに筆者作成（最終確認日 2021年5月4日 http://takaoka.zening.info/Nara/Asuka/Asuka_dera_Temple/Map.htm）、【資料8】日本書紀における寺院建立や仏教信仰に関する記述(川尻秋生「飛鳥・白鳳文化」『岩波講座日本歴史第2巻 古代2』2014年、岩波書店、pp.179-208を基に筆者作成)

5. 本研究の成果と今後の課題

本研究の成果として、次の二点があげられる。

第一に、「問いの性質」に着目した先行授業実践について分析・検討をおこなうことで、博学連携の実態と課題を明らかにすることができた点である。先行授業実践の多くは、How型の発問や博物館の所蔵資料から資料を読み取る指示などが中心であった。しかし、How型の発問は、知識の網羅的な獲得はできるものの、探究的な学びには不向きである。よって、Why型の発問をおこなうことで、学芸員の専門的知識や博物館の所蔵資料を活用した探究的な学びになると考えた。

第二に、学芸員が授業で活用すべき「専門的知識」の具体を明らかにした授業モデルの開発をおこなえた点である。これまでの博学連携に関する先行研究では、博物館や学芸員がもつ専門的知識を学校の教育活動に活用することの必要性が謳われている。しかし、学芸員が学校教育において活かすべき「専門的知識」の内容についてまでの議論がおこなわれることは少なかった。そこで本稿では、学校教育において、博物館・学芸員を活用する際に求められる専門的知識の具体として、考古学者のもつ専門性に加えて「考古学の考え方」を取り上げ、それらを踏まえたWhy型の問いを用いた授業モデルの開発をおこなった。

これにより、従来の博物館活用の問題点である、「知識の断片的な獲得」「学芸員の専門的知識の具体を明らかにする」などを克服できたと考えている。

今後は、授業実践において授業モデルの有効性を検証す

るとともに、授業が未達であったその後の時代における博物館の活用について模索していきたい。

6. おわりに

本研究では、横浜歴史博物館と学校教育の連携に着目し、「問いの性質」に着目した先行授業実践の分析をおこない、特質や課題を明らかにしたうえで、それらを改善する方策として「Why型」の発問を取り入れた授業モデルの開発をおこなった。

新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大を受け、博学連携の在り方も過渡期にあると考えている。これまでの来館型中心の連携から、非来館型での活用も注目されてくるであろう。本稿で提案した「Why型の発問」や「学芸員の専門的知識の具体」は非来館型活用であっても活かされると考えている。よって、今後は、非来館型の博学連携の授業モデルについても開発・実践していきたい。

謝辞

今回の研究をおこなうにあたって、鈴木康二氏(公益財団法人滋賀県文化財保護協会)、石川眞椰氏(クラーク記念国際高等学校)にお世話になりました。この場で御礼申し上げます。

なお、本稿で提案した授業モデルは、拙稿「分布図から時代の特色と転換を理解する原始・古代史授業開発—小単元「残されたモノから古代社会のしくみを探れ!」を手掛かりに—」で提案した授業実践に、大幅な加筆修正を加えたも

のである。

註

- 1) もちろん授業でおこなわれる全ての発問が表1のように分類できるわけではないが、本稿では表1を基に執筆を進める。
- 2) 中学校の社会科授業だけでは事例を集めることができなかったため、小学校社会科の授業も分析の対象とした。

参考文献

- 岩田一彦(1991)『小学校社会科の授業設計』東京書籍
- 岩田一彦(1994)『社会科授業研究の理論』明治図書出版株式会社
- 岩田一彦(2001)『社会科固有の授業理論・30の提言—総合的学習との関係を明確にする視点—』明治図書出版株式会社
- 大津透ほか(2013)『岩波講座 日本歴史 第1巻』岩波書店
- 黒沢浩(編)(2015)『博物館教育論』講談社
- 駒見和夫(2008)『だれもが学べる博物館へ—公教育の博物館学—』学文社
- 島田雄介, 神野晋作, 八田友和(2018)「学校所在資料の活用—学校現場に聴く—」『考古学研究』64(3): 10-19
- 都出比呂志(2011)『古代国家はいつ成立したか』岩波書店
- 八田友和(2017)『物質資料の変遷から社会構造を認識する 中学校社会科授業開発—単元「残された物から古代社会のしくみを探れ」を事例に—』兵庫教育大学学位論文
- 八田友和: 山内俊男(2019)「分布図から時代の特色と転換を理解する原始・古代史授業開発—小単元「残されたモノから古代社会のしくみを探れ!」を手掛かりに—」『兵庫教育大学学校教育学研究』32: 143-152
- 八田友和(2020)「ミュージアム・リテラシーの涵養を目指した博学連携モデルの提案—歴史系博物館を活用した授業開発を事例に—」『日本生涯教育学会論集』41: 93-102
- 八田友和(2021)「鯨絵から時代の転換を理解する日本史探究授業開発—小単元「鯨絵から新しい時代の到来を読み解け」を事例に—」『学校と歴博をつなぐ—令和元・2年度博学連携研究会議実践報告書—』p.33-43
- 原田智仁(2018)『中学校 新学習指導要領 社会の授業づく

り』明治図書出版

広瀬和雄(編)(2004)『季刊考古学・別冊 14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣

公益財団法人日本博物館協会(編)(2013)『子どもとミュージアム—学校で使えるミュージアム活用ガイド—』ぎょうせい

横浜市歴史博物館 HP「博物館を活用した授業例」(最終確認 2021年5月4日)

https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/ex_class/

Abstract;

In this study, using the collaboration between the Yokohama Museum of History and a school as a case study, we analyzed the class by focusing on the "nature of questions," clarified the issues and characteristics of the previous class practices, and proposed a class model for the collaboration between the museum and the school that incorporates inquisitive questions (why). The analysis of the previous class practices revealed issues such as a large number of how-type questions. To address this issue, we developed an instructional plan that incorporates the use of the curator's specialized knowledge by setting inquiry-type questions (why) in the class model. I believe that this lesson plan will help overcome the issues of "fragmented acquisition of knowledge" and "clarification of curatorial expertise."

Keywords

the Nature of Questions, Question of Why, Museum Curators's Expertises, Archaeological thinking, cooperation between schools and museums